

弥生時代の集落 – 単位集団論の現在 –

草原孝典

【講座の概要】

弥生時代の集落は、近年の歴史研究の成果によってイメージが変わってきています。弥生時代の集落は、竪穴建物数棟がまとまる単位が基礎となっているという単位集団論によって分析されてきました。竪穴建物 1 棟は家族に対応し、複数の家族が有力な家族によって束ねられていると考えられていました。これは、古代国家が成立した時に、その基礎となる家父長制家族の原型である複合家族で、少なくとも奈良時代には家父長制家族が成立しているという前提に立ったものといえます。

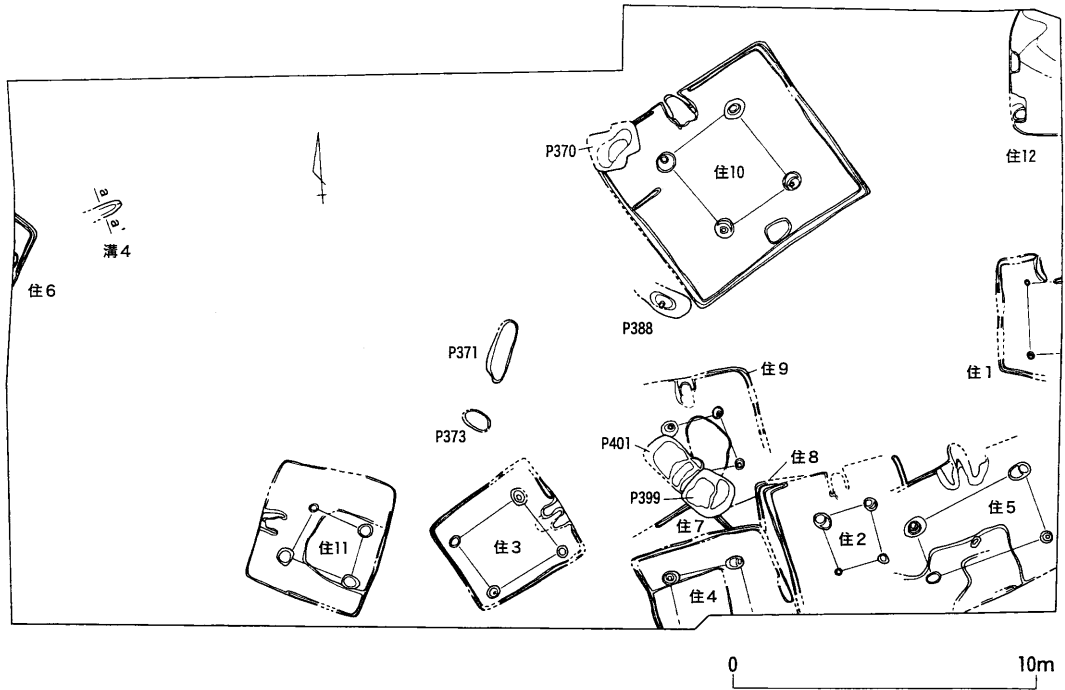
単位集団論は、数多くの集落遺跡の分析に使用され、多くの成果を上げてきました。その一方で、単位を見分けることができない集落遺跡もあり、とくに大規模な集落で認められる場合がでてきました。ただし、長期に使用された集落の場合、複数時期の建物が建て替えによって重複していることから、単位の析出が困難になっているのだと理解されてきたのです。ところが、火山灰や洪水で埋もれた集落の発掘調査により、同時に存在した竪穴建物の実態が明らかになり、必ずしも単位集団を形成しているのではないことが明らかとなったのです。むしろ竪穴建物 1 棟が集落の基礎単位となっていることがわかってきたのです。

文献史学、とくに女性史の分野の研究により、古代家族のイメージも変わってきました。その研究成果によると、奈良時代には家父長制家族はまだ未成立で、結合と分解が頻繁におこる流動的な家族が古代家族の実態であったとされてきました。古墳から出土する人骨の分析でも、血縁関係のない人骨が同じ古墳に葬られるのは古墳時代後期からとされてきており、家族の定着がかなり遅かったことを示唆しています。

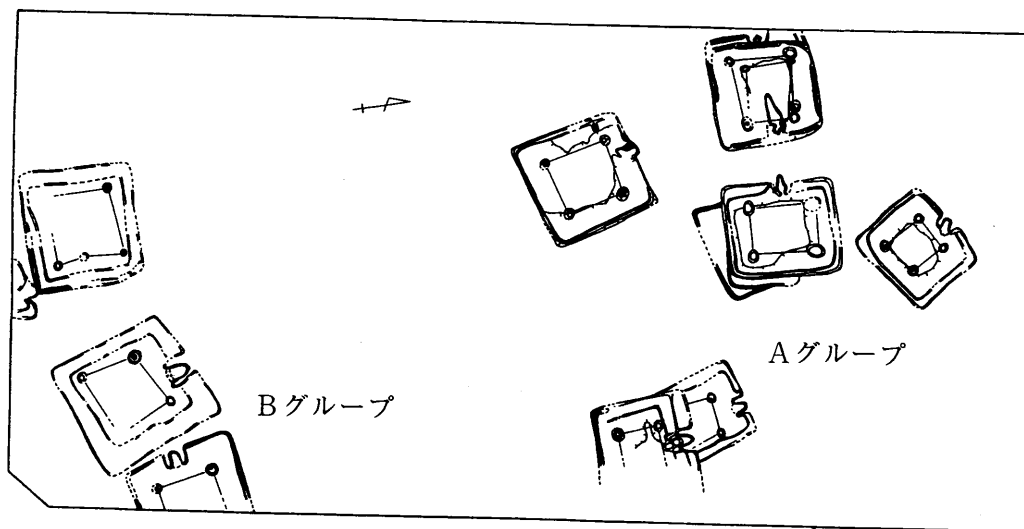
集落遺跡の研究は、当時の家族構成に関わる内容を含んでおり、さらにそれが社会の理解や国家の成立の研究に大きく関わるものです。近年の歴史研究の進展により、集落遺跡の理解が大きく変化してきているのです。

【参考文献】

今津勝紀 2015 年「古代の家族と女性」『岩波講座日本歴史 4 巻古代 4』岩波書店

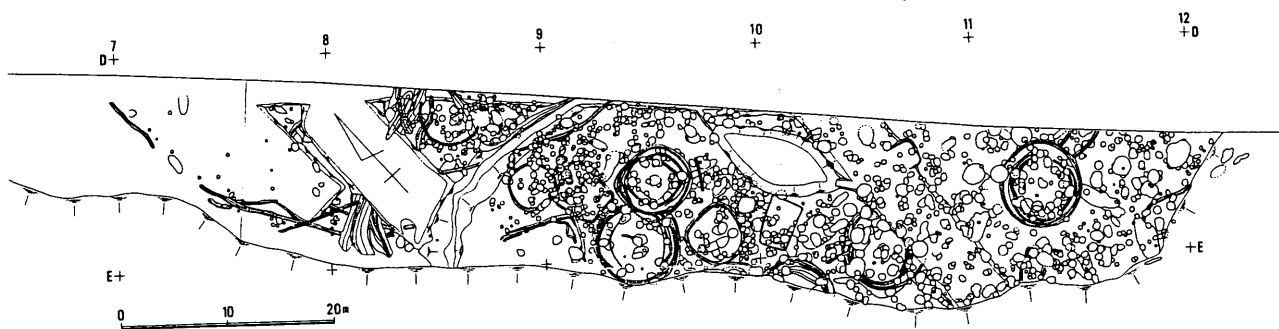


津島江道（岡北中）遺跡古墳時代後期

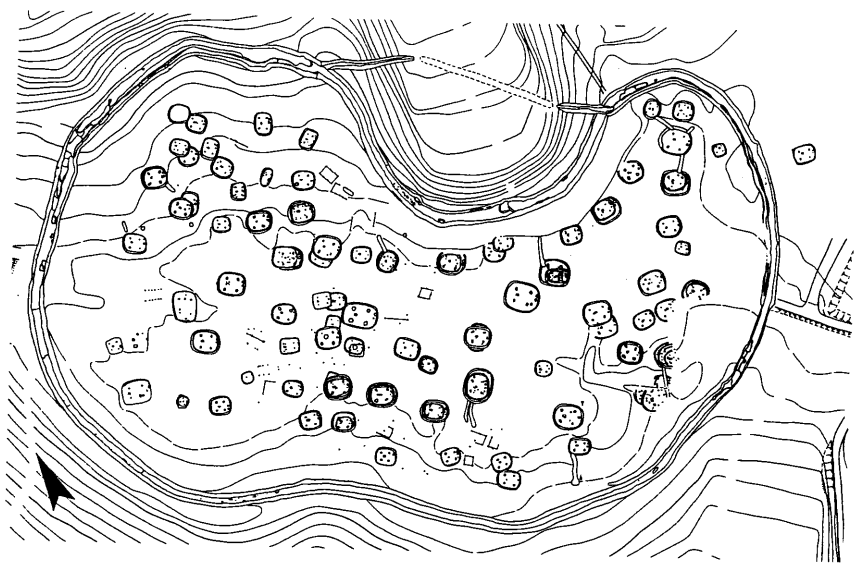


赤田東（竜操中）遺跡古墳時代後期

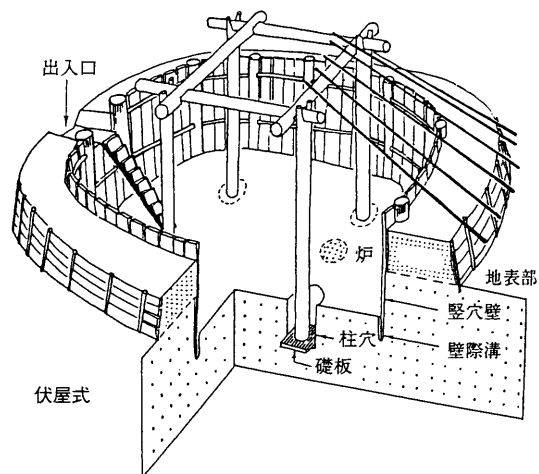
集落遺跡の発掘調査例



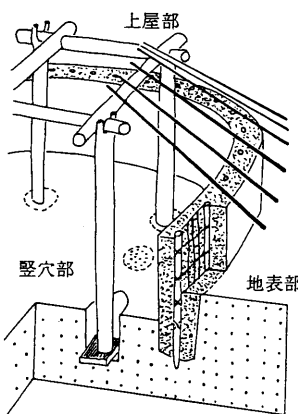
弥生時代遺構配置図



環濠集落 (大塚遺跡)

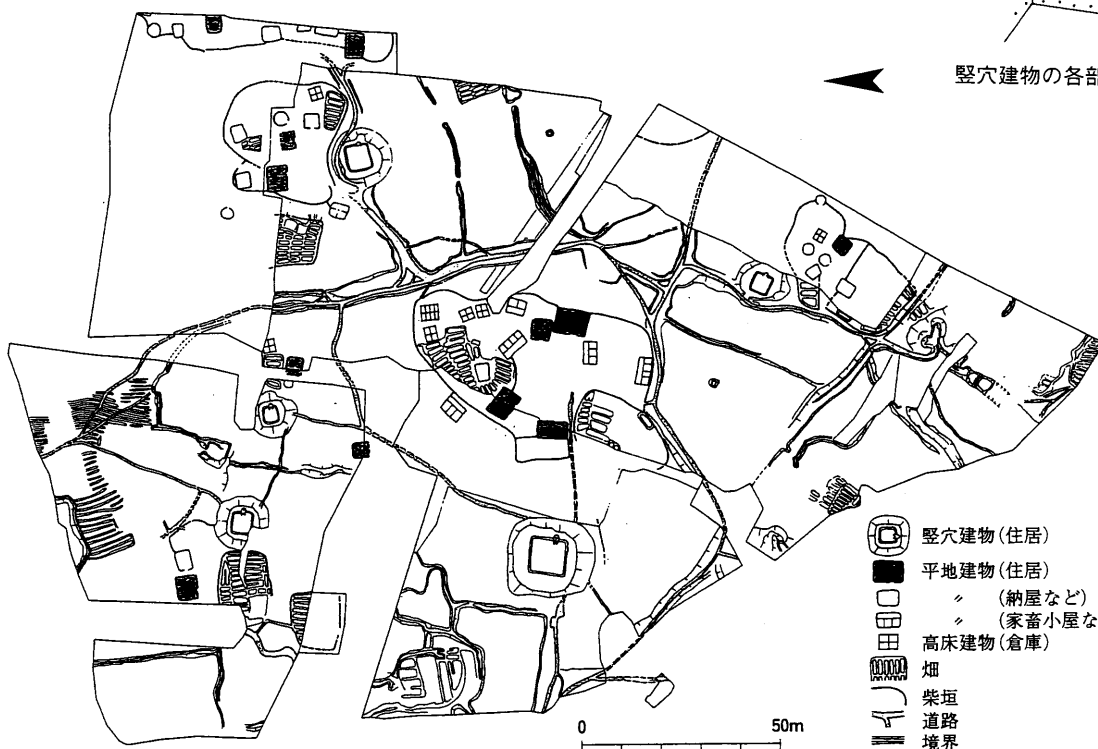


伏屋式



壁立式

竪穴建物の各部の名称



火山灰で埋まった集落 (黒井峯遺跡)

- 竪穴建物 (住居)
- 平地建物 (住居)
- (納屋など)
- (家畜小屋など)
- 高床建物 (倉庫)
- 畑
- 柴垣
- 道路
- 境界